

シロクマの身体は白く見えるが、  
実際はそうではない。

kngsmym

もともと僕は本を読む人間ではなかった。いや、正確に言えば、中学生頃まではかなりの量を読んでいたのだけれど、高校に上がったあたりからブツリと読書歴は途切れていた。その僕を読書の世界にひっぱり戻したのが、伊坂幸太郎さんの短編「透明ポニーベア」だった。

当時僕は東京に出てきたばかりで、新しい住まいやら新しい職場やら、慣れない物づくめの状況にやや辟易としていた。溜まっていくストレスをどうにかしようにもまだまだ勝手のわからないことばかりで、ストレスを上手く処理できないことそれそのものをストレスと感じる悪循環の中に居た。このままでは・・・と、ちょっとした焦りを感じ、何かしらの気分転換が必要だと強く思いはするものの、環境を大きく変えたばかりだったので金銭的にもあまり余裕が無く、お金をかけずに出来ることは無いか、と考えていて、ふとなんとなく、読書に思い当たった。

文庫本の一冊も持ち歩いて通勤電車の数十分で読んでみてはどうか。そう思った僕は早速職場のビルに入っていた書店に寄って、色々と物色してみた。当時はちょうど伊坂さんが世の中に広く認知され始めた頃で、店頭レイアウトを見るだけでどうやら伊坂幸太郎という作家が匂らしいと誰しもが理解する、そんな時期だった。いやいやしかし、いきなり買ってみて、はずれだったらなんだか寂しい。ここはまず、複数の作家の作品が納められてるアンソロジー形式の本で、短編を読んでみてはどうか、と打算的なことを考えた僕は、伊坂さんの作品を含んだアンソロジーの中から「I LOVE YOU」を選んで購入した。

初めて触れた伊坂さんの文章は、読みやすく、わかりやすく、少し理屈っぽく、淡々としていた。そのせいか僕も、なかなか面白いなー、という程度で、それほど感情のブレもなく淡々と読み進めていたのだけれど、油断してた僕は、第一期伊坂さんの最大の特徴である、伏線回収劇に晒され、目から鱗を落とすことになる。

それは予期せぬ出来事で、まるでさらわれたかのような気持ちになった。上手く説明できるか疑問ではあるけれど自分なりに言葉を尽くすとすれば、知らないうちに巻き込まれ、予想もしないところに連れて行かれ、気づくと収束は始まっていて、目の前で次々と答えが明かされ、読み手としてはただ驚き続けるしかなく、ぐいぐいと手繰り寄せられているうちに着地点へと行き着かされた。行き着かされたと言ってもそれはもちろん心地よい感覚で、こんなところにつれてきていただけたんですか、と感謝したくなるような場所にたどり着いていた。それは短編であるがゆえに凝縮されて、より強烈な体験として訪れたのではないかと思う。

一目ぼれ、というより、一読ぼれとでも言えばいいのか、その一作で僕は完全に伊坂さんの作品に恋してしまい、それから貪るように伊坂さんの作品を読み続け、既刊の作品は全て読み終わり、それでは飽き足らず二周三周と読み続けながら、今も常に新刊を待ち続けている。

この文章は、「私に影響を与えた一冊」というコンテストの為に書いているが、一冊と言うより

伊坂さんの短編ひとつが僕の生活の中で読書を不可欠なものにしてしまった。伊坂さんだけを待ち続けるのはいささか辛く、すばらしい体験をさせてくれる作家さんが他にもいるのではないかと、鶉の目鷹の目で探すようになってしまった。幸いながら何人かの作家さんを見つけることが出来て、その方たちの新刊が出るのを楽しみにしつつ暮らしている。

読書は、空想の世界を堪能する方法として、最良の手段の一つであると思う。自分の妄想力が試されるという一面をもつものの、裏を返せば、言葉と文章に対して脳内で何を創造するかは読み手の裁量に任される。絶世の美女は、常に自分にとっての絶世の美女として現れ、ヒーローはかっこよく、イケメンの知人は完璧なまでにすばらしい友人として存在できる。現実になんかありえないじゃん、なんてのは無しだ。理想の世界を築くことが許される。それはとても甘美な体験だと思う。

あのとき読んだのが、例えば「ラッシュライフ」であったなら、少し、違っていただかもしれない。「オーデュボンの祈り」であったなら、また少し、変わっていたかもしれない。そういう諸々を含んだ上で、「透明ポニーベア」（を掲載している「I LOVE YOU」）は「私に影響を与えた一冊」である、と思う。あのタイミングで読む本として、最良の一冊であった、と考えている。